

ハーンの紀行文の中の怪談

井上真史

「幽霊とお化け」より

朝方、雪が激しく降っていたが、夜には空も冴え渡り、しーんと静まり返った冷気が、ダイヤモンドのように澄んでいる。一歩進むたびに、凍りついた雪が、足下でサクサクと心地好い音を立てる。

思わず「金十郎、雪の神様っているのかい」と尋ねてみた。

「さあ、いかなものでしょう」と金十郎が答えた。

「私が存じ上げない神様だって、たくさんいます。神様の名前を全部知っている者なんて、どこにもいませんよ。ただ

雪女なっていますかね」

「雪女って？」

「雪の中において、いろんな顔に変化する、真っ白けの女の子です。別に人に危害を加えたりはしません。ただおどかすだけです。昼間は、ぬーっと顔をつき出して、一人旅の者などをおどかしたりします。でも、時々、夜になると立ち上がり、立ち木よりも大きくなるんです。そして、しばらくあたりを見回していたかと思うと、やがて吹雪と一緒に消えてしまうんです」

「顔つきはどんなかね？」

「真っ白で、やたらに大きい顔をしています。とてもさびしそうな顔をしています」

（金十郎はここで「さびしそうな」という言葉を使っているが、私が思うにこれは「不気味な」という意味で使ったのであろう）

「今まで見たことあるのかい、金十郎」

「いや、まだごいませせん。でも、親父ががきの時分に見たといっておりました。なんでも雪の中を近所の遊び仲間の家に向かう途中、大きな白い顔が雪の中からぬっと立ち現れ、さびしそうにあたりを見回していたんだそうです。親父は怖くなって大声を上げて、逃げ帰ってきたそうです。家中の者が外に出て、あたりを見回しても、雪がしんしんと降っているだけでした。それで、これは雪女の仕業だと合点したそうです」

「今でも、雪女をみかけるのかね」

「ええ、大寒と呼ばれる一年で一番寒い時分に、藪村にお参りにいく連中が何度か出くわしたそうです」

「藪村には何があるんだね」

「藪神社がございます。藪の天王さんという風邪の神を祀っている、昔から有名な神社があるんですが、松江から九里ほど山の頂きにあります。その神社のお祭は、二月の十日と十一日に開かれますが、その両日には珍しいものが見られるんです。性の悪い風邪をひいた者が、藪神社の神様に治してもらおうと願掛けをするのですが、風邪を治していただいた暁には、裸でお参りすると誓うんです」

「裸で？」

「ええ、お参りする者はみなわらじ履きで、男なら禪一丁、女なら腰巻一枚で、雪の中を、神社に向かいます。それはまた雪が深い時分です、男は御幣の束と抜き身の刀、女は鏡を携えて参ります。神社に着きますと、神主はそれを受け取り、奇妙な儀式を行います。それから、神主は、古くからの習慣に従って、病人になったふりをして横になってうめき、漢方の煎じ薬を飲むんです」

「裸でお参りなんかして、風邪をこじらせて死ぬような人は出ないのかね。金十郎」

「いいえ。出雲の百姓は存外丈夫ですし、寒さを感じぬよう駆け足で神社に向かいますので。帰る際には、みな厚くて暖かい着物を羽織ります。でも時々、帰り道に雪女が出ることもあるんですがね」

「日本の庭にて」より

古代ギリシャの木の精ドリュアスを思い出させる、なかなか哀れ深い伝説がある。それは、京都の武家屋敷の庭に生えていた柳の木の話である。その柳には不気味な噂があったので、屋敷の借り主は木を伐り倒してしまいたいと思っていた。ところが、ある侍

が次のように言って、その屋敷の借り主の侍を思いとどまらせようとした。

「そんなことをするなら、拙者に売ってくれぬか。うちの庭に植え替えようぞ。あの木には魂が宿っておる。それを伐り倒すというのはいかにも残酷話だ」

こうして、その侍の手に渡った柳は新しい家の庭ですくすくと育っていった。木の霊は、その木を買い取って育ててくれた

ことへの感謝の思いから、美しい女に姿を変え、その侍の嫁になった。夫婦になったふたりは可愛い男の子も授かった。

さて、それから数年後のこと、その土地の藩主により先の柳を伐るようと命令が下った。女は激しく泣き崩れながら、初めて夫に事の真実を打ち明けた。

「これで、私も死ななければなりません。しかし、私たちの子供はこれからも生き続けますでしょう。あなた様なら、変わることなくこの子を可愛がってくださいませね。それだけが、私のせめてもの慰めでございます」

この言葉にびっくりした侍はなんとか妻を引き止めようとしたが、それはどうしても叶わなかった。妻は永久の別れを告げると、木の中へ姿を消してしまった。いうまでもなくその侍は大名にその柳を伐らないで済むよう、万事を尽くして説得にあたった。しかし大名の方は、三十三間堂という大きな寺の修復のために、どうしてもその木が必要だった。

ところが、柳の木を伐り倒してみたものの、とたんにその木は重たくなり、大の男が三百人集まってもびくとも動かなくなつた。とそのとき、その侍の息子が柳の枝を一本折り取って小さな手に持ち「おいで」と柳の木に声をかけた。するとその柳の木は、寺の境内を滑るようになり、その男の子の後をついていったという。

榎も化け物の木と言われているが、ときとして最高の宗教的な崇拜を受けるときもある。古い人形などがよく供えられている荒神様の霊が、古代榎に宿るとされているからである。そうした榎の木の前には、よく小さな祠が設けられていて人々はそこを参拝したりしている。

「神々の国の首都」より

数多い松江の神社や寺の中でなにかしら不思議な伝説のまつわりついでない所は、ひとつとしてないのではなからうか。それぞれの地区には、数多くの伝説が残っているものだ。三十三ある町のそれぞれに、独自の怪談が残っているのではないかと思う。その中から、ふたつほど話をここに紹介しよう。いずれも、日本の民間伝承の一面をよく伝えている話である。

松江の北東部にある、普門院の近くに、「小豆磨橋」と呼ばれる橋がある。その昔、夜ごとに女の幽霊が、その橋のたもとで小豆を洗っていたと言われたことから、その名がついていた。

日本には「杜若」という、紫色の美しいアヤメ科の花があり、それにちなんだ「杜若の歌」という謡がある。しかしその小豆磨橋

の近くでは、この謡をけつして歌ってはならないと言われていた。その理由は定かではないが、その端に現れる幽霊が、その謡を聞くと怒り出し、歌った本人に恐ろしい災難が降りかかる、ということであった。

あるとき、怖いもの知らずの侍がその橋を通りかかり、「杜若の歌」を大声で歌った。幽霊など現れなかったので、侍は笑い飛ばして家に帰った。

すると自宅の門の前に、見知らぬすらりと背の高い美しい女が立っている。女は、お辞儀をすると、女性が手紙などをしまっておく、漆塗りの文箱を差し出した。侍も礼儀正しくお辞儀を返した。ところが、女は「私はただの使いでございます。奥方様よりこれを預かって参りました」と言い残し、そのまま姿を消した。

侍がその箱を開けてみると、中には血だらけの幼い子供の生首が入っていた。あわてて家に入ってみると、座敷の床で首をもぎ取られたわが子の死体が横たわっていた。

「神々の国の首都」より

中原町にある大雄寺の墓地には、こんな話が伝わっている。

中原町には小さな飴屋があり、水飴を売っていた。水飴とは、麦芽でできた琥珀色の液体で、お乳がもらえない赤ん坊は、お乳の代わりに水飴を飲んだものである。

毎晩遅い時分になると、白い着物を着た蒼白の女がその店にやってきて、一厘分の水飴を買っていくのであった。その女はあまり

にも痩せていて顔色が悪いので、飴屋の主人は気にかかり、幾度となく女に声をかけてみた。しかしいつも、女はなにも答えなかった。ついにある夜のこと、主人はとても気になってしかたがなかった。その女の後をつけてみた。すると、その女は墓地の中へ入っていった。飴屋の主人は恐ろしくなり、すぐさま逃げ帰った。

翌晩も女は飴屋にやってきたが、今度はなにも買わなかった。

ただ一緒に来てほしい、と手招きするだけだった。主人は知り合いの者たちを連れて、その女の後を墓地までついていった。すると、女はある墓の前で、ふいに姿を消した。

その途端に、墓の下から赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。主人たちが墓を開けてみると、夜ごと飴屋に通ってきた女の亡骸があり、その傍らに、まだ生きている赤ん坊がいた。そして赤ん坊は、提灯の明かりに微笑を浮かべていた。

赤ん坊のすぐそばには、水飴の入った小さなお碗が置いてあった。死んですぐに女は埋葬されてしまったため、赤ん坊は墓の中で生まれたのであろう。それで母親の霊は、こうして水飴を運び、わが子の面倒を見ていたのであった。

「愛は死よりも強し」というわけである。

「日本海に沿って」より

女中は私たちに、これからどちらへおいでになれるのかと尋ねた。私の連れは、おそらく鳥取まで足をのばすことに答えた。

「まあ、鳥取！ そうでございませうか？ そこには『鳥取の布団』という古い話がございませうが、旦那様はご存知ですか？」

実のところ、「旦那様」はその話を知らなかったもので、ぜひとも聞きたいとせがんだ。そして、これから紹介するのが、通訳の口を通して聞いたそのままの話である。

ずいぶん昔のことである。鳥取の町の小さな宿屋に、旅の商人が宿をとった。宿屋の主人は、この上なく念を入れて心から客をもてなした。新しく開いたばかりの宿屋だったので、評判の良い宿屋にしたいと思ったからである。十分な元手がなかったため、家具などの調度品も什器も古道具やから買い入れたものだった。それでも、こざっぱりと、居心地よく整えられていた。旅商人は盛んに食べ、気持ちよくお酒もかなり飲んで、用意されていた布団に入り、寝入ってしまった。

人は深酒して寝ると、ぐっすり寝入ってしまうのが常である。ましてや少し冷えた夜に、ぬくぬくした布団に入っていればなおさらのことだ。ところが、客はうとうとしかけたところで、部屋の中で聞こえる子供の声に目が覚めてしまった。その声は何度も同じことを尋ね合っているようだった。

「あにさん、寒かろう」

「おまえ、寒かろう」

部屋に知らない子供が入ってくるとはなんとも迷惑なことだと思いつつも、客は別に驚かなかった。というのも、日本の宿屋の

部屋には鍵のかかる戸はなく、部屋と部屋は襖で仕切られているだけだからである。だから客は、暗闇の中で子供たちが部屋を間違えて入ってきたのだろうと思ったのである。客はやさしく注意した。すると、少しの間、静かになった。やがてまた幼くかばそい声が悲しそうに聞いた。

中略

客が去ったあと、宿の主人もなにか変だと思いはじめ、布団を調べに空部屋へと上がっていった。部屋に入ってしまったら、一枚の掛け布団から声が聞こえてくる。他の布団からはなにも聞こえてこない。主人は、そのかけぶとんを自分の部屋に運びこみ、その夜、それを上に掛けて寝てみた。声は夜明け近くまで続いた。

「あにさん、寒かろう」

「おまえ、寒かろう」

主人は一睡もできなかった。

夜が明けると、宿屋の主人はその布団を誰から買い入れたのかを確かめに古道具屋へ出かけた。店の主人は何も知らなかった。その布団はある小さな店から買ったもので、その店の主人も、町のはずれにあるもっと小さい店から買い入れたものだった。宿屋の主人は、次々と出どころを訪ねていった。

やっと布団の持ち主がわかった。それは大変貧しい家族が持っていたものだった。その家族に家を貸していた近所の家主が売

ったものらしかった。その布団にまつわる話は、次のようなものである。

中略

まず死んだ両親の着物を売り、続いて自分たちの着物も売った。綿入れも、粗末な家財道具も、火鉢や食器も。そのほかのこまごました物も手離していった。毎日、なにかしら売っていき、最後に残ったのが一枚の布団だった。とうとう食べる物なくなり、家賃も払えなくなった。

大寒に入り、激しい寒さが襲ってきた。その日、雪が高く積もり、兄弟は家を出ることさえできなかった。ふたりはたった一枚残った布団をかぶり、寒さにふるふる震えながら、子供心にもお互いを思いやって声を掛け合った。

「あにさん、寒かろう」

「おまえ、寒かろう」

火の気もなく、燃やすものもない。辺りが暗くなり、氷のように冷たい風がびゅうびゅうと家の中まで入ってきた。

ふたりは風の音が怖くてたまらなかったが、それよりも怖かったのが大家だった。家賃を払えとふたりをたたき起すのだ。鬼のような顔をした、情け知らずの大家だった。家賃が払えないとわかると、一枚だけ残っていた布団を取り上げ、ふたりを雪の中へ追い出し、家の入り口に錠をおろしてしまった。

このときふたりが着ていたものといえば、紺の薄い着物一枚だけだった。ほかのものは、食べるために残らず売り払ってしまった。

かわいそうなこと、ふたりには行く先がない。近くに観音様を祀るお寺があったが、雪が深く、そこへ行き着くことはふたりにはとうてい無理だった。そこでふたりは、大家が去るのを見届けると、家の裏側に身を潜めた。そのうち、寒さがふたりを眠りに誘い、お互いしっかりと寄り添いあって、深い眠りに落ちていった。

眠っているふたりに、神様が新しい布団を掛けてくれた、それは神々しいばかりの純白の大変美しい布団だった。ふたりはもう寒さを感じることもなく、何日もそこで眠り続けた。ある日、誰かが永眠したふたりを見つけて、千住観音堂の境内のお墓に兄弟のための新しい寝床を作ってあげた。

この話を聞いて、宿屋の主人は、布団を寺に寄進し、ふたりの小さな魂が成仏するようにと、お経をあげてもらった。それからというもの、その布団が声を発することはなくなった。

「日本海に沿って」より

ひとつの伝説がまた別の伝説を呼び、今夜はいくつも珍しい話を聞いた。ひとときわ私の心に残っているのは、私の連れが急に思い出した話である。それは、出雲の伝説であった。

昔、出雲の持田の浦という村に、ある百姓がいた。とても貧しかったので、子供を持つことを恐れていた。だから、女房が赤ん坊を産むために、男は赤ん坊を川に投げ捨てては、妻には死産だっ

たと偽っていた。赤ん坊は男の子のときもあれば、女の子のときもあつたが、いずれの子でも夜に、川へ処分しに行っていた。こうして、犠牲になった子の数は六人にもなっていた。

ところが、月日も経つうちに、百姓の暮らし向きもよくなっていた。土地も買えるようになったし、金も貯まってきた。そんなときに、妻が七番目の子供を産んだ。今度は男の子だった。

そのとき、百姓はこう言った。「わしらも、ようやく子供を養えるようになったし、年老いたら、便りになる息子がいるだろうしなあ。それにこの子はかわいらしい。よし、ひとつ育ててみるか」

こうして、息子はすくすくと育っていった。日に日に頑なだった男は、自分の心の変化をいぶかしく思うようになっていった。わが子が日増しに可愛くなっていくのがわかったからである。

ある夏の夜のこと、男は赤ん坊を腕に抱き、庭先まで歩いていった。赤ん坊は生まれて五ヶ月になっていた。

その夜は、大きな月が出ていてあまりに美しかったので、百姓は思わず声を上げた。

「ああ、今夜は珍しい、ええ夜だ」

すると、赤ん坊が父親の顔を見上げ、大人の口調でこうつぶやいた。

「お父つあん、わしをしまいに捨てさしたときも、ちょうど今夜のような月夜だったね」

そう言い残すと、その子は同じ年頃の赤ん坊と同じように、ひと言もしやべらなくなった。

その百姓は僧侶になった。

「奇妙な体験——ある娘の回想——」より『アメリカ雑録』
「このような奇妙な出来事は、これまで多くさん見たり聞いたりしてきました。亡霊または生霊と呼ばれるものを見たこともあります。けれども、最後に私がシンシナティのある家で体験したことほど興味深いものはないでしょう。その家は西五番通りにあり、わたしは料理婦兼女中として働いておりました。その家にまつわるいわくがあったのですが、わたしは詳しいことを知らないで、ここでは、若い娘がひとりその家で死んで、後に戻ってきた、とお話するにとめておきます。でも、わたしがその話を聞いたのは、家へ来てしばらくたってからのことでした。ある日の夕暮、わたしは用を言いつけられて、二階にある寝室のひとつに上がって行きました。そして、真白な服を着た、背の高い若い女の子が、黙って鏡の前に立っているのを見たのです。夕日が血のように赤く染まって沈んだあとのことで、かすかな薔薇色の輝きはまだ薄やみの中に漂っていましたから、物の輪郭などもはっきりしていて、よく見えました。家の人達は皆、階下で夕食をとっているはずで、それで、初め部屋に入った時わたしは、鏡の前の婦人は、どなたかわたしが到着を知らされていなかったお客様に違いない、と考えました。ちょっと立ち止まってその人を見ましたが、こちらに背を向けているので顔は見えません。並はずれて背が高く、黒い髪は鏡の上の暗い影とひとつになって見分けがつかないよ

うに思われます。そうだ、鏡をのぞいてみよう、と思いつきました。そこで鏡を見ますと、映っているのは、沈黙したままの白い長身の姿です。が、顔も見えません。わたしがその白い人影にさわろうとして近寄ると、人影は、まるでろうそくの炎が消えるかのように、鏡に吹きかけた息が薄れて行くように、すっと消えてしまいました。

「人は時にわたしのことを霊媒と呼び、黒い円の中に座って靈魂を呼び出すのを手伝ってくれといいます。でも、いつも断ってきました。不思議に思われますか？ 本当を申しますと、死者の眠りを妨げることなどするどころか、反対におこうがわたしをそっとしておいてくれれば、わたしとしては、もうそれだけで大変な難いのでございます」

「私の守護天使」(池田雅之訳)

すると、わたしがいることに初めて気がついたかのようにジェーンは振り返った。ジェーンが微笑みかけてくれるかと思つてわたしは顔を上げた。……しかし、そこにはジェーンの顔はなかった。顔の代わりにあったのは、青ざめた、のっぺりとしたものだけだった。わたしが驚いて目を見張っているうちに、ジェーンの姿はかき消えてしまった。

「わが家の女中」『クレオール物語』遠田勝訳 講談社学術文庫
ゾンビ信仰の一つの形は、さまざまな未開民族が抱く靈的な迷

信にも見られるが、これはある種の悪夢の体験に由来するよう
だたとえば親しい人がゆっくりと醜く姿を変え、ついには恐ろし
い悪魔になるといった類の夢——ゾンビもまたアラビアの砂漠の霊
のように、旅の道連れ、古馴染みなどに姿を変えて、また時には
動物に化けたりもする。それでクレオールの人々は、日が暮れ
てから淋しい道で生き物に出会うと、たとえそれが迷子の牛や
馬、あるいは犬であっても正体もなく震え上がってしまう。子供
のやんちゃに手を焼く母親は、ゾンビの猫を呼びますよ、などと
いつてなにか動物の名にゾンビをつけて子供を脅す。「ゾンビに食
い殺されるよ」というのは、田舎へ行けばどこでも非常に効き目の
ある脅し文句だ。そういう所では、ゾンビは日が沈めばいつでも
出てくるものだと言われている。それに対して町では必ず午
前二時から四時までの間に出ると言われている。少なくともシ
リリアはそう言う。

「四時になりますと、アンジュラスの鐘が鳴る前にゾンビは元来た
所へと帰ります」何故か？

「町の通りで人に会いたくないからですよ」

「ゾンビは人が恐いのかい、シリリア？」と私は尋ね返す。

「とんでもない。ただ自分のしていることを知られたくないんです
よ」

シリリアはまた、夜、外で犬が吠えていても、決して窓から外
を覗いてはいけないと言う。そんな犬は「悪い生き物」かもしれな
いから。「もし覗いているのに気づいたら、きつとこう言いますよ。

『わざわざベッドを出て、人のしていることを覗くなんて、ずいぶ
んおせっかいな奴だ』

「それでどうなるんだ、シリリア？」

「それから目をくりぬかれて、盲目にされます」

「でもシリリア」ある日、私は尋ねた。

「お前自身はゾンビを見たことがあるのかい？」

「あるどころか、しょっちゅう見ますとも！……この部屋を夜、
のそのそ歩き回っているんですよ——まるで人みたいだね。揺り
椅子にも座りますよ。そこでゆっくり揺られながら、あたしを
見るんです。だからこう言ってやるんです。『いたい何の用がある
のさ。あたしやこれっぽっちも人様に悪いことはしてないよ。さっさ
と出てお行き！』そう言われると出ていきます」